# 連歌茶談残編

へ 5
3511
3

門 へ利 5
號 35/11
巻 3上

# 連歌茶談残編序

無相和尚乃はしめ給ひきの茶
談はいふ書手見るに前後續
三編は連ゝなるえて手のまゝに
北ゆきさゝ給ひこの残編八つの於

らくにもかゝらす倭訣の字
へはちへはとつまるむかしお
ふこやうも手はつゞきまて
にらやうにしも冷れ逃乃た
ゆまと菊義も手とむの布衣也



ほうそは先達れせちをのへ
てはの人手斜に書落乃心は
しく浅かり給ぬ書わさになんれ
のまゝ行馬れむしうるを和尚
やまうはう手猿ふ出や婦の

ゑらく年々ころのいくほんとも
見まうたねくかうその端まひ
にこゑ後にはしまるに出るる文政
六とせいつ年集れ秋霜月のは
しめくよ 檀德正寶掌志るし



連歌のよりて來るゆゑんを
よみさきつくそのいへよと
かきまくかなてはきそいはゆく
あんある一笑さみそ名をしるるさき人
らこの外まをもめしこ 篇を注一

て嵯峨のかくれの庵あきしにいる
とくいなりしころ泊瀬にいまそ
かりし冬桐茅者ちかひむかし
野のひろき沙弥の郷のかたり
おもしの比よりつらいとそのすゝ



年ころ此道をとりえて名を
久しくみまつりこゝろしのひつゝ
十とせあまりかりやのうちに
らういのむかしをしのびて連歌十
巻百句ゝゝ連歌說詔并六句を

世にきこえたる句とえらひて桜か子
あしかひしは桜あきらかにせや連歌
百韻同茶談といへる文の数々
まつりあひて此道の輩結ひと
しのまてその茶談乃ちらしめ千



てまなき言をとなへ侍者として
きこえぬるとやられ年ふきうそ
かうまりこえてまたくよりその文
くの名のとむしうや道をつくる
うへなでいはつまかきと花のかと

ふじとつこのあらきあしたにうれひとなりけり
こゝろきゝたるこのみちをとりてこととする
なりしにわかえを
のこすになん
文政みつのとし庚辰のとし

み月きうの日菅原亭
杏花園主
こうしるす

# 連歌茶談残編

○

拾遺集第十八巻にのせたるところはれんがを四五句出さん

中將にはべる時右大辨源致方朝臣のもとへ座へお梅をおりてつかはすとて　右大將實資

流俗はいろにはあらず梅乃花

致方朝臣

琢金をへた物とこそ見れ
春よしみねのよしかゞむきめろ
もとよつゝもをとて

藤原忠君朝臣

たれもひたちぬるそふにもあるか那
むとめ
かくらでもありまし物を春かゞみ



ひろきさの御息所内にまいりてを
そくわさらせたまひそれバ
くらをべし上やもいまでにきみ
さそうし侍それバ
聞ふやさそわれもまちつる春の日を
巳上

○

檜垣嫗集に曰をたものどもあ川まり

てよみがゝかるべきをゑをつけさせん
とてかくいふ
わさげミれ中よぞたてる棹鹿ハ
いでこれがをゑつけよといへど
秋乃山邊やそこにえゆらん
已上

○

馬内侍集に女郎花れ歌ありて次よ曰



さがれいろなるころとやきく
といひしかば
をみなへしてむ我身ハ野邊なれや
又曰きんまうれたとこそのちる花り
たまし梅乃花をふみよさしてをこせ
まれバ
むかしよ似たるむ色れ花か郎
といひたりしかど

梅花むかしのことをうたがへと
そら乃あしきれかあれるやなそ

○　已上

枕艸紙は人のいへにつきくしたも
の段に曰ふみこそなをめでたきも
のなれまるかなる世界にある人はい
みじくはぼつかなくいかならんされ



もふにふミをみれば昔いまさしむ
かひあるあうにはぼゆるいみじきこ
となるかし我思ふ事をかたやりつれ
ばあしこまでもゆきつかざるらめと
んゆくこゝちこそされふみといふ事
なからましかばいかにいぶせくされ
ふさがるこゝちせまゝしよろづ乃事
はもひくてその人はもとへさてこ

まぐとかきてをきつれバたぼつら
なさをもなぐさむ事をるにまして返
事ゑりれバいのちをのぶべらめる哉
ることもりるやといつり
案ぜるる連歌もかくのごとし発句を
してたくれバ脇句を付てらへし平句
をしてたくれバ次を付てかへしまこ
とに文中ゐ一興なり





○袋草子第三ニ曰俊頼ノ歌ニ云ク
みりのうさをたつるなさるハなりまさり
こひしき人もなみとおもしるる
故公實卿云ッミヅノウミノノ字ハヲ
ソロシクヲケルモノカナ後生ハ難ㇾ置キ
字ヲト云云
故將作ノ許ニテ左京被ㇾ詠歌ニ云ッ

あふとみてうつれかひハなけれとも
はかなき夢そいのちなりける
俊頼當座ニ感歎シテ云シ人ハウツツニトゾヨ
マムノノ字油瑩ノ上ニハナアブラヒ
ク所也トテ深ク感之ヲ云云詩歌ハ只一字也
後拾遺ニ兼盛歌云
あさちふの秋の夕暮なくむしハ
わかことしたにものやかなしき



我等ハアサヂフニトゾヨマムノノ字
甚深ノ字歟といへり
案ずるに連歌も先達の指南によるにも
を直してのに作れとやゆなり
○奥義抄中之下に曰
なてわさにわかれるたまのをゝぬきて
ありとほしとハしらすやあるらん

此歌は和泉國にいまもありとほしの明神にまうでまゐる人によるよなよてかの明神乃あらはれてよみたまへりけるとなんまうでこの神は本弥をむかしのみかど四十よりはいぬる人をばとをきくにへをひつかはしあるをころしなどしなされけるに老まゐるれやもちまゐらする人乃孝はて

ろふかくして家の内をふかくほりてそこに屋をたてゝこれはやをかくしをきて日ごとにいきゐりてをがみつゝまぐるあひだにならびの國はみかどこのくにをうちとらんとするころありてはかりことをうかゞはんとて白木のかえ志もはなじさまにそげれるをもとをもゑ志るしつけてた奉とて

つゝへされたりみゝど人をはじめてともれたれどさらにしる人なしこのはとこつち乃そこみはやのもとまいたりてこのことをかたるにいふやうその木をむやき河ようゝべむにをゑへしもまなりなんとをしふそのよしを奏したれはそのまゝにしてあるしつゝをせるまさりたれば又はなじさ





まなるくちなはをふさつをくりてこれにめはとこあるをべきよしをいひたれはさはのごとくこのはとこはやまそふにくちなはふさつをならべて其尾のかさにどもへをさしあてはめくちなはま尾をはたらゝしてんといへべそのよしやましゝなり又なくわたの玉乃わりれるあなにをくぬきて

といひをくれり是をまさちふは蟻の
こしにいとをつけて玉乃うちあなは
蜜をぬりてぬらぬかたよりなりをい
れよといふそのまゝにしさるはあり
蜜のかをかぎてとほまぬれどいとし
たがひてとほされぬかくてかへしを
くれるにかのくに乃みかどをそれを
ぢてこれくはをえうちさらずなりは



ありみかどこの事をあやしみてまび
ねたまふにしかくとやかれべられ
より老ぞるものをつる事ぞでまり
て人みなよろこびをなしありこのれ
やといふきかの明神なりさてかくは
みたまへるなりといつり
案ずるは和歌はも連歌はも今の世に
四十巳上を老といふて賀し侍る事は

いとめでたき政なり

○更科日記に曰八月ばかりにうづまさ
にこもるに一條よりまうづる道に
をとこくるまふたつばかりひきたてゝ
ものへ行にもろともにくべき人ま
つなるべし過て行にずいじんだつも
のをおこせて



花みにゆくと君をみるかな
といはせたれば かゝるほどの事はい
らへぬもびんなしなどあれば
ちくさなる心ならひに秋の野の
とばかりいはせていき過ぬといへり

○西行法師撰集抄第三に曰過にし比こし
の方へまうで侍しに船さか川を船に

てなんわたり侍しに此船さしれかひをもとらで水にまかせて船をくだし侍しかばなにとなくかく
みなれざほとらでぞくだるたかせ船
と詠て侍しかば此船の中にありつる僧乃かく
月のひかりのさすにまかせて
と付て侍しと云云

又第六に曰大納言經信卿俊頼朝臣等の人々にしなまの花みんとて大井川をわたり峰によぢ谷にくだりてあそびなんどし給ひけるにある木のもとによはひ五十ばかりなる僧此禪定せる侍り人々むらがりよりて終日夜をがら法文をぞとかれける夜あけてのち今はさのみある庵さわざならねば此

ひじりにとなをくわかれてみまい
らんなんどちぎりてのち俊頼卿かく
なきてぞかへる雲乃あけぼの
とのたまひけるに此ひじりやがて
まさもらん秋をたれむ乃雁ぞにも
と付けるにいよく思ひましてかへ
りきと云云
案ずるに是等はことも連歌にあれべ



連歌なり初心乃ものは連歌なりこれ
もふなるべし初のは後拾遺集第十五
巻雑部に載せるところは源師賢朝臣
のよみ歌なり後のは新古今集第十三
巻恋歌に載せるところ乃攝政太政大
臣良經公のよみ歌なり

○

仙傳抄に曰連歌の席は立花に発句を

しかたらばその躰にたがはざるていに
立邉し若きゝずハ松を志んに居て下
草に當季の物を用ゆるが異曲なる
よろしからず
又云志んをべものをそらにをかるが
ほんなりそへもれそへまするがよたな
またさへば
うぐひすの聲なかりせば雪きえぬ



といふ上れるに
春まださといひで春を志らずし
と付まするごとくそへ草をそることな
意なりといへり

○

後奈良院御撰何曽に曰

発句

三輪れ山ありくる月もかげもなし

をぎまくら
秋乃田の露にもおなる氣色か那
ほたる螢
平台
瀧乃ひゞきに夏ぞれどろく
あいさ光
竹生嶌まる山るもなし
志やう笙



うそざえしまる雪ぞたえせぬ
ゑ川ね
ゐふる朔日あきへ晦日
さゝづき盃
わごせまそふも此春ぞくり
なかめれ木棘
たくびやう武者乃軍評定
ひき木挽

さしぬきれとそゝむしきるかつりむ
さしなは
露霜をきて萩乃葉ぞちる
つた月
笹かきわけて鹿やふきらん
さしかさ傘
山がらが山をもなれてこそこし
からにしき



いそがしきよもあゆまぬものか
ねりぬき練貫
たりかさねきるなまとなまる
たりぐを
車乃うへまこしへをそれり
くし櫛
長老れ二まひ寺を出たまふ
ついかさね

六なをぞきするかふ乃朝ゕ東

たつがしら

和歌

春もはな夏も卯乃花な秋楓

冬へこほりれあるさぐる多

しきかた

れそひもきのふもけふもてもまゐて

月をも日をもれがまざりかり

御神樂

もろこしにきのむ社乃あれバこそ

まいらぬまでも身をバきよむれ

唐紙せうじ

ふくろかれくろかハなくて耳づくれ

耳よなたこそれかしかりかれ

ふつく忍文机

宇佐もみや熊野もれなじ神なれバ

伊勢住吉もたなしかゝぐ

うぐいも鶯

うしやたゞ足もゐをめず古里に

うつりていゆく山路なりけり

またゝび木天蓼

義朝をよしなき父乃くびをとり

ゆみとりながら弓を捨つる

ともちどり



たもふこといゝでたゞよやゐゝぬべき

我にひとしき人しなければ

たしき

已上

○

今物語に曰或所にて連歌の上手と聞

ゆる人ゝより合て連歌しけるに法師

れまことにあやしげなるがかみきぬ

ろぼろくとゐるうちきて縁のはしも
はぬさり人〻はかしと思ひたるに法
師ふしものを何はてやらんと問たり
人〻あまりはなかしくてなにとなく
くらきもとかず足もぬらさず
といふぞと答へまいりたれバ法師お字
て二三返でかり詠じて面白くゆもの
か郎といひたれどいそぎはかしとは



ものはさらバ恐れながら付ゆきんとて
名ずしれぬ花の志ら川わたるには
と付まいりたれバ人〻手をうちてあさ
みたりさて法師をいとまやとて走出
たる後は此事定家卿きてたまひてい
かなるものはかとかへをぐゆかし
くこそいかさまにてもまじものはて
きよもあらじ當世きるほどの句など

つくる人はなりがたしよきもあしきも人をあなどる事あるまじき事とぞいましめられたるといへり

○

古今集序にかすみをあはれび露をかなしぶといふを季吟註本に飛鳥井大納言雅親卿そのかみ将軍慈照院殿に講釈の抄に曰あはれびをあはれみと



よみかなしぶをかなしむとよむが習ひなりといへり

又第一巻春上の抄に曰法師のよみやう世流布に出家をば皆ほうしといふ勅撰などにも皆ほつしとよむべしといへり

又第二巻春下の抄に曰或抄に云山吹は酴醾（ドビ）なり歟冬を山吹といふも誤な

又本草歟冬は蕗なり朗詠に歟冬誤綻
暮春風と清慎公醍醐を誤ていふにや
といへり
又第五巻秋下乃抄に曰ひぢ川ちを刈田
にまたたふるいねをいふ稆穭いづれ
もよむ字なりといへり
○
三代集の中に今時を読べからずといふ

云〻の類古今集季吟註本の抄に曰ひ
ちてわびしきべらなれべらなり
べらなるたもほゆれたもほゆる
あぢきなくちるぞめでたき明ぞ
ゑにゆるぬぞしまゝんちりぬへみ
ほかゝらくしみつく△さくら
ちる袖にこきいれて春されば秋
されば後撰集第一巻季吟註に曰に

かひ香をも今はよむまじき事とぞ為家
抄義といへり　拾遺集第七巻季吟註
に曰むげに定家卿云無下にといふ云
詞物名の歌にあれども常に此歌によ
むべからずと云々同第十三巻季吟註
に曰ねるやねりそ定家卿云此云詞を
まねびて後べからずといへり



後撰集第五巻秋上季吟註に曰のもせ
といふ詞を定家卿の僻案抄に云庭
もせ宿もせ路もせ野もせ水もせくに
もせ皆野此面水乃おもてにみちて
あまねき事乃詞なりといへり
わがせこわきもこ此云詞を男女に通
じて用ゆるなり古今集第四巻季吟註

本の抄に曰 わがせこが衣のすそを吹かへしうらめづらしき秋の初風といふ歌を秋の初風のめづらしきといはんとてわがせこが衣のすそを吹かへさせてうらめづらしきとつゞけたり我せこ夫妻に通じて用るなり此歌は妻をいふなり男の衣のすそを吹かへすといふべからず定家卿云我背子我妹子夫妻通用勿論のよし存ずるなりうらめづらしとはいづれの詞にもかよひてうらかなしなどよむ同事なり一條禪閤云うらめづらしはうら悲しきと同じことなりうらは心をいふ源氏に舟人も誰をこふとか大嶋のうら悲しげにこゑのきこゆる といへり

案ずるに男の歌にわかせことよめるは新古今集第二巻春部に唐人の舟をうかへてあそふてふけふそわかせこ花かつらせよ又女の歌にわきもことよめるは千載集第六巻冬部にわきもこかうちものをその水波にあさこそ冬はきちはしめけれしくれども多分はわかせこは女の歌乃詞なりわきもこは男の歌の詞なり産衣にも此事ありといへども委しからず意得かたきも今と違ふなり見合をべし

○

まくり手といふ言葉は後拾遺集第四巻良暹法師が歌に　袖ふれは露こほれけりあきの野はまくりてにてそゆくへかりける　といふを季吟註に曰

まくりては袖まくりと八雲御抄にあり袋草子云住吉ノ神主國基良暹ガ歌を難メ云まくり手といふ詞やはある良暹云やしほの衣まくりですゝて 如何ト國基云僻事也紅にはまふり出といふ事なりそれを書誤也良暹暫按メ又云風越乃峯よりおるゝ賤のきそれ麻きぬまくりてすゝてと侍るに是もまふり出を誤歟ト云國基閉口スといへり案ずるに此云ゝ産衣にもみえざれども委しからず

○

日本六十餘州の中に茅ノ一乃名所といふに奥州塩竈の浦なり古今集終巻季吟註抄に曰伊勢物語にとをるおとゝ六条わたりに家づくりして山をつた

池をまへたるにも塩がまのうらを
まねびつくられけり在中将みちのお
くまで歌枕をみるに我みかど六十餘
州乃中に塩がまのうらになんをぞ
めでたるとこそしるし侍めりきさの
くまのわりのうら丹後乃あまのはし
だてめもおやなりとてもうつされず
おもひやるさへ哀におもりげに立て
こそかなしう侍れ云云といへり

○

百和香は古今集第十巻季吟註本此抄
に曰百和香ハ五月五日に百草を取て
合せる香なり口決と云云又後拾遺集
第十巻吟註に曰百和香は和名乃香此
名の類に云神仙傳云淮南王張錦繍之
帳燔百和之香といへり

○文字に至る等相對してよめる事後撰集
第七巻に
かみなまやまたくもりしくるれは
もみちあかくそ秋もみえける
季吟註に曰曇るに對して極あかくと
よめりといへり同巻に
なかつきの有明の月もありなから



はかなく秋はすきぬへらなり
吟註に曰ありあけの月は有なから
はかなくと有無の字を對して讀るなる
へしといへり又第十巻に
おもへともあやなしとのみいはるれは
よるのにしきのここちこそすれ
吟註に曰あやなしといふに對して錦
といふなりといへり又第十二巻に

まさりし秋ハきぬれとえし人乃
こころもよそになりもゆくか那
吟註に曰くるとよそになるとを對し
てよめるなりといへり又拾遺集第四
巻に
あさらしきまさへちかくなりゆけハ
ふりのをまさる年乃暮か那
吟註に曰新古のことはを對してたくみ



なる歌なりといへり又第十四巻に
わすれしよ袖とちきりしそのことはを
うつつにつらきさんなりけり
あさらしと何に命をたもひかん
わすれハふるくなりぬへき身を
吟註に曰初の歌をゆえうつつ對して
よめり次の歌を新古對してよそりと
いへり又第十六巻に

あたらしき年はくれどもいたつらに
我身のみこそふりまさりけれ
吟註に曰是も新古對してよめりとい
へり
案ずるに予が発句四季二百題の中に
文字言葉對等の発句はほしみな是等
の吟註のこゝろによるものなり
○



駒迎は後拾遺集第四巻季吟註に曰八
月駒迎は信濃甲斐武藏陸奥等の牧の
駒を内裏へ奉ることなり前の集に委
註といへり拾遺集第三巻吟註に曰こ
まむかへにまかりてとは八月に東國
より牧の駒を貢さるを逢坂へ勅使行
迎ることなり是は八月十六日信濃勅(デ)
旨(シ)の駒迎なりといへり後撰集第七巻

吟註に曰むさしの御馬むかへとは駒
迎とて八月に東國より牧馬をまゐるを
逢坂まで勅使立て迎へ来るとなり延
喜式に云八月廿五日武藏勅旨牧立野
牧云云是なり年中行事歌合に云大か
た武藏の國よりハ秩父れ御馬廿足小
野れ御馬四十足立野乃御馬十五足と
しごとにまゐるなり云云といへり





案ずるにこのことは産衣にもみえた
りといへども少しづゝ違ふところあ
り足合匝し連歌には駒迎駒引ともに
八月十五日れことにして用ひきたれ
り産衣にいふがごとし

○

悦目抄に曰かなをえるといふはの文
字なりの文字はやそらかなる中れや

そうなるかな〳〵は二をえらびての
文字をとるべし又好みよむべき文字
七字ありきえ免てやさしき文字なり
しもよのやみむ　是等は文字なるを
忠岑忠見などもすし文字を末にをき
つればよはけれどやさしといへり棟
梁なども文字を上は下にをたつればかな
らずつよくて云ふつぐと申せる　康秀
なる文字を上は下にをきつればかな
らずよもけれど伺をつけてやさしと
いへり遍昭素性などの文字は下により
きてはやもらゝに云なりてやさし
といへり中のきみなど文字を上は下
よならべてかならずたくみなりとい
へり友則など文字を上は下にありて伺
をまとくる弁やさしといへり人

紀貫之よむ文字はたくみに聞ゆると
いひけり人丸む文字ありてよしとほ
めける歌

たつた川紅葉みだれてながるめり
わたらはにしきなかやたえなん

又初は一字と終の一字をくりかへり
ま候事ありそれもおほくは歌まやさき事
れどもらざるれろは五文字は大事なり



誹諧より外はよまれぬものなりその
儀歌にはよめる
ら
らちのうちまくらふる駒のうちますけは
のれるをろこれむちろうちゝら
ま
まんまうの花をたむくるさほうしの
經よむこゑまきまうとかりけり

る
るりの色にさくる朝顔をきて
もゝなたほとそ思ひしらるゝ
れ
れいのまそらきのめをきる人ゆへに
こゝろつくして待れこそきれ
ろ
ろうたてみなとも志らぬ夕やみに

ふ総こきいさを夜まの月あろ
見より外のまぐれの沓冠をやをくよた
も侍れども此くりかふりへらりるれ
ろ大事にたぼゆたわくるよまれぬな
まといつり

○

三十一文字の歌の根元はすさのを乃
みことの御歌なり古今集乃序に

やくもたついつもやへかきつまこめによ
やへかきつくるそのやへかきを
の文字とまりの歌
吹まかふ野風をさむみあき萩の
うつりもゆくか人のこころの　古今
むかしよふねのそまきときくらん
行末もしらぬ月のひかりの　拾遺
あらはれていとゝ濃くもえゆるかな



あやめもしらす流れるる袖の　源氏
ねなし文字なき歌
世のうきめみえぬ山路へいらんには
思ふ人こそほだしなりけれ　古今
五字あまりの歌
ありそ海の波まかきわけてかつくあまの
いきもつきあへす物をこそ思へ　八雲
四字あまりの歌

われもかくもの思ふ人はまたもあらしと
おもへは水乃下にもありけり　伊勢

三字あまりの歌

わたつ海乃沖津志ほあひにうかふあはの
消ぬものからよるかたもなし　古今
冬乃池のかもの上毛にをく志も乃
きえて物おもふ比にもあるかな　後撰
ほのくと有明乃月のつかけに
紅葉ふきおろす山おろしの風　新古
和歌の浦や沖津志ほあひにうかひ出る
あはれ我身乃よるへ志らせよ　同

二字あまりの歌は数多これあり爰に
は出さず

五七五七七の五句乃一句ごとにかさ
ねことばある歌

秋もあき今宵もこよひ月もつき

所もところなる君もきみ　後拾

こゝろこそこゝろをはかる心なれ

心乃あたはこゝろなりけり　奥義

おもふ人おもはぬひとのおもふ人

おもはさらなん思ひしるへく　後撰

貫之のほめられたる歌

おもひつゝぬれはや人乃みえつらむ

夢としりせはさめさらましを　古今



風ふけはおきつしら波たつた山

夜半にや君かひとりこゆらん　同

俊成のほめられたる歌

桜花さきにけらしもあしひきの

やまのかひよりみゆるしら雲　古今

月やあらぬはるやむかしのはるならぬ

我身ひとつハもとの身にして　同

男をつまとよむ事萬葉集に松浦さよ

姫乃事を山上憶良がよめる歌
遠津人まつらさよひめ妻こひに
ひれふりしよりおへる山の名
伊勢物語に女のよめる歌
むさしのはけふはなやきそ若艸の
つまもこもれり我もこもれり
後撰集に在原季方が娘右近ひとの男
をあひしりてつかはす歌



唐衣かけてたのまぬときぞなき
ひとのつまとはおもふものから
和泉式部がよめる歌
けさはしも思はん人はとひてまし
つまなき閨乃うへもいかにと
公任卿和歌に九品をたてられけるそ
の上ゝ品の歌二首
ほのぼのとあかし乃浦のあさきりに

しまかくれ行舟をしそおもふ　古今
春たつといふはかりにや御吉野の
山もかすみて今朝はみゆらん　同
古今集中第一の名歌
有明のつれなくみえしわかれより
あかつきはかりうき物はなし
後鳥羽院より俊成定家家隆へ古今集
の歌いづれか第一なるべきぞと御尋
ありし時三人におなじく此歌を古今千
首の中の第一の秀逸なりと申されし
となり殊更定家卿いたくほめられけ
るとぞ
八歳の童女のよめる歌
神無月しくれふるまもくるゝ日を
きみまつほとはなかしとそおもふ　後撰
九歳なるをのわらはのよめる歌　土佐

日記に
こぎてゆく舩にてみれハ足引乃
山さへゆくをまつハ志らすや
五音連聲ハひゞきにて五七五七〻ハ
句乃つぎ多くのつがひもはなれざる歌
ほのくとをち乃外山にきさなくなり
志もしかさらへねくらさためて　竹園
あさゆきをみ森乃木を意もみえぬ　近



たちゅくしをり巻ハ香をして　同
もの一字にて意になる歌
志ら波乃あとなきかたに行舩も
風そたよりハしるへなりけり　古今
重荷に小舟をそへるといふ歌
としのうきをつゝまんとをなるをもすくハ
いそくこつけをとりもそへなん　後撰
紀貫之第一ハ名歌

むすふての志つくにゝこる山の井乃
あかても人にわかれぬるかな
此歌は古今集第八巻離別歌季吟註抄
に曰これハつらゆき第一の秀歌とい
へりと云云

定家卿一代乃名歌
あけハ又秋乃なかはも過ぬへし
かたふく月のをしきのミかハ　同

此歌の事兼載雑談に曰後鳥羽院家隆
卿に今天下一の作者誰そと御尋あり
しにぬべまさ秋乃まも過ぬべしの歌
をきてむかみに書てたそしてまうり
退しとなりといへり又細川幽斎口傳
聞書全集に曰これハ豪逸なりして定
家卿一期の秀逸なりといへり

古來の人〻は秀逸なりとて称美せら
るゝところ乃歌少〻今爰にかきあつ
めをくものなり

たかきやにのぼりてみれは煙りたつ
たみ乃かまとはにきはひにけり　仁徳
人乃親はこゝろはやみにあらねとも
子をおもふみちにまとひぬるかな　兼輔
水無月のてる日乃影はさしなから

野邊もや秋のけしきなるらん　忠通
有明乃月まてまあれやほとゝきす
まて一聲はなくかたもみえず　頼通
五月雨はみつのみまきのまこも艸
かりほすひまもあらしとぞ思ふ　相模
木の葉ちるやとはきゝわくことそなき
しくれするよもしくれせぬよも　頼實
住人もなき山里乃秋は夜も

月のひかりもさひしかりけり　範永
沖津風ふきにけらしな住吉乃
まつのしつえをあらふしら波　經信
朝またき八重さく菊乃九重に
見ゆるは霜乃をけるなりけり　長房
ふもとをハうちの川霧たちこめて
雲ゐに見ゆる朝日やまかな　公實
いかはかりさひしからまし山里の



月さへをまぬこのよなりせハ　公圓
池水はこよひの月をやとしもて
こゝろのまゝに我ものとみる　堀川
あふさかハなつまちとてこそさしかと
こゝろつくしのなはこそありける　道雅
武士乃やなみつくろふこ手のうへに
あられたはしるなす乃篠原　實朝
山里乃秋のをゑはそれもひきる

かなしかりけり木枯乃風　西行
身にさむく秋のさよ風ふくなへに
ふりにし人の夢にみえつゝ　人丸
あふさかのせき乃清水に影みえて
いまや引らむ望月乃駒　貫之
相坂乃関の岩かとふみならし
やまたち出る切原のこま　高遠
おもかけに花のすかたをさきたてゝ
いくへこえきぬみね乃志ら雲　俊成
かつらきやたかまの山のさくら花
雲ゐのよそにみてやすきなん　顕輔
みよしのゝ山かきくもり雪ふれは
ふもと乃さとはうちしくれつゝ　俊恵
白雲とみゆるにしるしみ吉野の
よしのゝ山乃花さかりかも　匡房
雪ふれは木ことに花そさきにける

いつれをむ免とわきてをらまし　友則

百敷の大宮人もいとまあれや
さくらかさしてけふもくらしつ　赤人

深山路やいつより秋の色ならん
見さりし雲乃ゆふくれの空　慈鎮

朝日影にほへる山乃さくら花
つれなくきえぬ雪かとそ見る　有家

うつりゆく雲に嵐乃こゑすなり



ちるか正木のかつらき乃山　雅経

木枯やいかにまちみん三輪乃山
つれなき杦乃ゆふくれのこゑ　具親

葛城や高間はさくらさきにけり
たつたの奥にかゝるしら雲　寂蓮

人すまぬふはの関屋は板ひさし
あれにし後はたゝ秋乃風　良経

秋の日はいとよりよわきさゝかにの

くものきるてよ萩の上かぜ　正徹

かへるさの物とや人のながむらん
まつよながらの有明の月　定家

わすれなんよにもこしぢのかへる山
いつはた人にあはんとすらん　伊勢

山里をきりのまがきのへだてずは
をちかたひとの袖はみえてまし　好忠

わがやどの花みがてらにくる人は



ちりなんのちぞこひしかるべき　躬恒

かぞふれば我身につもる年月を
おくりむかふとなにいそぐらん　兼盛

けふこずはあすは雪とぞふりなまし
きえずはありとも花とみましや　業平

きのふといひけふとくらしてあすか川
ながれてはやき月日なりけり　列樹

ちはやふるかものやしろの姫こまつ

よろ川よふとも色ハかはらし　敏行

たらちめハかゝれとてしもうは玉乃

わかくろかみをなてすや有らん　遍昭

あさまたきあらしの山ハさむけれハ

ちるもみち葉をきぬ人そなき　公任

くらきよりくらきみちにそいりぬへき

はるかにてらせ山乃はの月　泉式

うくひすの初音や何乃色ならん



きけハ身にしむ雲乃曙　孝善

うきくみまかく玉つさと見ゆるか那

かきこれてまかへるかりかね　國基

うつらなくまの入江乃濱風に

をはな波よる秋のゆふくれ　俊頼

長月の十日あまり乃みかの原

川波きよくを見る月かな　家隆

山寺乃雲のゆふくれきてみれハ

いりあひの鐘に花そちりける　能因

萩かもなま　神にかけて高津乃

おのへの宮にひれふるやまれ　顕昭

世にふるはくるしきものを真木の屋に

やすくもすくる初しくれかな　讃岐

きみこすはひとりやねなん笹の葉の

みやまもそよにさやく霜夜を　清輔

有明乃んちてそきれさかつねに



日影もそひて出ぬとおもへは　能宣

あまの川かはたの風に声きこえて

そらをみ渡るかさゝきの橋　元輔

ふりにける松ものいはゝとひてまし

むかしもかくや住乃江の月　實定

きり〱すいたくな啼そ秋の夜の

長きおもひはわれそまされる　素性

草の庵をなにつゆけしとおもひけん

もらぬ岩屋も袖はぬれけり　行尊
あま乃川かはへ涼しき七夕に
扇の風をなをやかさまし　中務
さゝなみや志賀乃都はあれにしを
むかしなからの山さくらかな　忠度
あやしくそかへさは月の曇りにし
むかしかたりに夜やふけにけん　行遍
ゆきやらて山路くらしつ郭公



いまひとこゑ乃きかまほしさに　公忠
五月やみくらはし山のほとゝきす
おほつかなくもなきわたるかな　實方
きふかき乃まそ志るたに山里は
われよりさきに人こそありけり　經衡
山ふかみおちてつもれる紅葉の
かはけるうへに時雨ふるなり　嘉言
あふまてとせめて命乃おしけれは

こひこそ人乃いのちなりけれ　頼宗
我のみそかもひしけとも高砂乃
おのへ乃松もまつさきてりけり　義定
たのみてはひさしくなりぬ住吉乃
まつこのたひはしるしみせなん　赤染
夏山はあを葉ましり乃をそさくら
あり花よりもめつらしきかな　盛房
きくきひとめつらしけれはほそてたき





いつも初音乃ここちこそすれ　永縁
ぬれくもかりゆかんえし露乃
うへ毛は雪をうちはらひて　道濟
まちし夜のふけしを何になけきけん
おもひきえても過しつる身を　越中
よしさらはつらさは我にならひけり
たのめてこぬは誰かをしへし　清少
都にはまつさきふにてえしかとも

おもふちりしくしらかへのせた　頼政
たつら夜をいせ乃濱荻おりしきて
いもこひしらにみつる月かな　基俊
かねてより思ひしことそふし柴乃　加賀
こるはかりなるなけきせんとは
したもえにおもひきえなん煙りたに
あとなき雲乃はてそ悲しき　成女
袖のうへに待ゆへ月ハやとるそと



よそになしても人のとへかし　秀能
まつよひにふけゆく鐘の声きけハ
あかぬわかれ乃とりハ物かは　小侍
きくやいかにうわ乃そらなる風たにも
まつにをとする習ひありとハ　宮内
みちのへ乃草の青葉に駒とめて
なをふるさとをかへりみるかな　成範
神代にハありもやしけんさくら花

ゆふのかさしはかれるためしも　紫式

山ふかみ春ともしらぬ松乃戸に
たえ〳〵かゝる雪のたまみつ　式子

あまの原はるかにひとり詠れは
たもとに月乃出にけるかな　増基

あさちふや袖にくちにし秋乃霜
わすれぬ夢をふくあらしかな　通光

石川やせみの小河乃きよけれは
月もなかれをたつねてそすむ　長明

こぬまても花ゆへ人乃またれつる
春もくれぬるみやまへのさと　伊綱

あふちさく外面乃木かけつゆ落て
さみたれはるゝ風わたるなり　忠良

まとちかきいさゝ村竹かせふけは
秋におとろくなつの夜の夢　公継

さほ鹿のあさたつをのゝあき萩に

たまとみるまておきけるしらつゆ　家持
ゆふされは玉ちる野邊乃女郎花
まくらさためぬ秋かせそふく　良平
筏士よまてこととはん水上は
いかはかりふく山乃あらしそ　資宗
さりともとたのむかれゆくをしも
松もへはしらぬ世よまかきらん　季保
時雨かときけは本の葉のふる物を
それにもぬるゝ我たもとかな　資隆
白波にはねうちかはし濱ちとり
かなしきものは夜半乃ひとこゑ　重之
子日してしめつる野への姫小松
ひかてやちよ乃陰をまたまし　清正
君か代のちとせ乃數もかくれなく
くもらぬそれ日かりにそみる　顕房
松く山乃松とろかしさもふきわけて

乃ある世そと人ましらせ給　後鳥

已上九十五首

○

八代集巻頭の歌八首を出さん

古今集　在原元方

年の内ま春ハ来にけりひとゝせを

こそとやいはんことしとやいは給

後撰集　藤原敏行朝臣



ふるゆきのみ乃しろ衣うちきつて

春きにけりとおどろかれぬる

拾遺集　壬生忠峯

春たつといふばかりにやみよし野の

やまもかすみて今朝ハみゆらん

後拾遺集　小大君

いかまねておくるあしたにいふことそ

きのふをこそとけふをことしと

金葉集　修理大夫顕季
うちなひき春ハきにけり山川の
いはまのこほりけふやとくらん

詞花集　大蔵卿匡房
こほりゐし志賀の辛崎うちとけて
さゝなみよする春風そふく

千載集　源俊頼朝臣
春のくるあしたの原を見わたせハ
かすみもけふそたちはしめける

新古今集　摂政太政大臣
みよしのハ山もかすみて志ら雪の
ふりにし里に春ハきにけり

已上

○

新古今集此中の三夕乃歌を出さん
さひしさハ其色としもなかりけり

まきたつ山の秋乃ゆふくれ　寂蓮

こゝろなき身にも哀はしられけり
しきたつ沢乃秋のゆふくれ　西行

見わたせは花も紅葉もなかりけり
うらのとまや乃秋のゆふくれ　定家

又

六玉川の歌を一首づゝ出さん

駒とめて猶水かはんやまふきの
はなの露そふゐて乃玉川　新古



みわたせは波のしからみかけてけり
卯の花さける玉川乃里　後拾

玉川にさらすてつくりさらさらに
むかしの人の恋しきやなそ　拾遺

あすもこん野路の玉川萩こえて
いろなる浪に月やとりけり　千載

ゆふされは塩風こしてみちのくの
野田乃玉川ちとり鳴なり　新古

わすれても汲やしつらん旅人の
高野乃おくの玉川乃水　風雅

巳上

案ずるに毒水は紀伊なり千鳥は陸奥なり萩は近江なり調布（テヅクリ）は武蔵なり外は攝津なり款冬は山城なりこれをあはせて一首によめる指南歌なりむつちどりむさしてづくりあふみさく



だ山やまぶきに津の外紀乃毒云云

○

拾遺集第七巻の物名の歌乃中に松蕈蒟蒻の歌あり十二支乃歌なり九文字づゝよめる歌三首あり

まつだけ

あしひきの山下水にぬれにけり
そのひまつたけころもなふらん

こにやく

蒟をえれはまめさにそりあをてら
こにやくほしわかなつむへく

吟注に曰こんにやくなり蒟蒻和名云
文選蜀都ノ賦ノ注ニ蒟蒻其根白メ以ニ灰汁ヲ煮ルニ凝テ成ル云云といへり

子丑寅卯辰巳

ひとよねてうしとらこそはうらひけめ
うきなきは身そわひしかりける

午未申酉戌亥

むまれよりひつしつくれは山にさる
ひとりいぬるに人ゐていませ

吟注に曰初に憂しは憂しと等なり一夜寐て
憂しなどれもへべこそみもこぬなら
めども我一夜にても名の立が侘しき
となり次に僻案抄に云此第二句又に

讀とぅず若櫃し作ればよやでたて
も学えず云云山よさるも去の字よや人
ぬていませへ人をひきぬてたもしま
せといふ詞なりまことに第一第二句
れ云黍前後心よくつでぅぬよやとい
つり

あらふねのみやしろ
くきもそもみをとりなるふぅせりへ



あらふねのみやしろくえゆらん
くちばいろのたしき
あしひきの山れ木乃ものたちくちへ
いろれたしきさそあそれなりぬる
かのぅもれむぅはだ
かのぅも乃むぅはきをたてふぅくらへ
わさらてまくにぅつるもうりそ
吟註よ曰かのぅも乃むぅもだき鹿皮

行縢（ムカハギ）行騰ともかく足をつゝみて身かるきやうにして旅行狩場等の具なり歌のこゝろはおの川の向縢（ムカハギ）をきてふかくあらはとなり僻案抄云むかばぎは九人のむかひをねといふ事をよめるにやといへり

○

拾遺集第五巻に六月晦日に茅の輪をこゆる時に唱ふる歌

水無月のなごしのはらへする人はちとせのいのちのぶといふなり

季吟註に曰六月祓は疾病消除悪鬼降伏等の功徳あればなり六月晦日に茅の輪をこゆるにも此歌を詠ずるよし公事根源にありといへり又後拾遺集第二十巻に

思ふことみなつきねとて麻乃葉を
きりにきりてもはらへつるかな
吟註に曰公事根源六月大祓に法性寺
関白記にも此歌を詠ずべしとみえた
る云云といへり
又拾遺集第十八巻に灌佛此事あり
灌佛のわらはを見侍りて
からころもきつよりたつる水ならで



わが袖ぬらさをものやなになる
吟註に曰灌佛のわらは本云灌佛日女
御之布施童女持参殿上人扶持如五節
からころもはきつといはん枕詞なり
唐衣きつよりたつるとは公事根源云
此佛生會ハ推古天皇より始まる釋迦
如來の倶毘藍城(クビラジヤウ)にて生たまひぬる時
天龍下りて水をそゝぎて釋尊にあぶ

せなりし事を申なり云云されバ龍よりたつる水とハ灌佛會に龍口より水を出す事あるをよめりその水ならで我袖ぬらさハ何そや君にこそなれとなりといへり

◯

贈答のなりといへる歌古今集十二十三十四恋歌に三首有り爰に出さん



小野小町

をろかなるなみたそ袖にたまハなすわれハせきあへすたきつせなれハ

在原業平

あさみこそ袖ハひつらめなみた川身さへなかるときかはたのまん

近院右大臣

いまハとてかへすことの葉ひろひ置て

をのゝものゝらかさみとやえん

已上

又後鳥羽院より定家卿に古今集此秀
歌十首撰ひてまいらせよと仰出さるゝ
ときの歌

読人志らず

なきわたる雁乃なみださやおちつらん
物おもふやとのはぎのうへ乃露

紀貫之

志ら露もしぐれもいたくもる山ハ
下葉のこらずいろつきにけり

菅原朝臣

秋風のふきあげにたてる志らぎくハ
はなかあらぬかなみ乃よするか

坂上是則

あさぼらけありあけ乃月とみるまでに

よしのさとにふれるしら雪

壬生忠峯

有明乃つれなくみえしわかれより
あかつきはかりうき物はなし

読人しらず

なとり川せゝ比埋木あらはれて
いかにせんとかあひ見そめけん

在原行平

わくらはにとふ人あらはすま比浦に
もしほたれつゝわふとこたへよ

読人しらず

たかみそきゆふつけ鳥かからころも
たつたの山にをりはへてなく

已上

又古今集誹諧歌少々

むめのはなみにこそきつれ鶯の

ひとしくといふひしもある
いくばくの田をつくればかほとゝぎす
しでのたをさをあさな〱よぶ
秋風にほころびぬらし藤ばかま
つゞりさせてふきりぎりすなく
枕よりあとより恋乃せめくれば
せむかたなみぞとこなかにをる
みゝなしの山乃口なしえてしがな
おもひ乃色乃下染にせむ
人にあはんつきのなきにはおもひをきて
むねはしり火にこゝろやけをり
われをおもふ人をおもはぬむくひにや
我おもふ人のわれをおもはぬ

已上

○

千載集第十八巻誹諧歌に六波羅密寺

の講に導師にて高座にのぼるほどに
聴聞乃女房あしをつミ侍りければよ
める

良喜法師

人乃足をつむにてしりぬわがかたへ
ふみをこせよとおもふなるべし

季吟註に曰六波羅密寺ハ天暦五年京
に疫病をこなはれ人おほくうせたり
しに空也上人憐みてみづから十一面

観音乃像を刻て祈たまへるに疫病止
まりとぞ歌乃心ハ懸想にてあしをつめ
るをいひあらはしたるべし文に踏を
そへたり又云山寺にこもりて侍りける
時ところある文を女乃もとより志む
くつかゝし侍りければよみてつかはし
ける

空仁法師

おそろしやきそのかけぢの丸木橋

ふみみるたびにわちぬべきか卿
吟註に曰これは序歌なりんある文を
こせしをわそれいましむるこころな
るべし誠に法師などんをもて見てえ
るべき歌なるべし女人を地獄の使と
いつりわそるるべしつてゑむべしと云云

○

狂歌合に曰此歌合を初まれ比世にそ



むかる貧客どものつれづくのあまり
に狂歌をよみて左右にわかちつがひ
侍るなるべしと云云
案ずるに狂歌合十番あり其中の六首
を出さん

節分にばあそこなひてふる衣
きまる音こそわかしかりけれ
銭米もてがち拂て露れ身の

をき所なた手をこそそれ
わもひね乃ほどもちげゝし正月れ
もちゐをくふと美まえしゝ所
正月ま牛房むゝりの尾をふりて
いなむとせしをくるゝ大根
下部ども徳よ福よといゝへども
なをくひきらぬいひハわけなし
三世心不可得まてハくひがごた



正月もちにむせて去なむや
○ 已上
御裳濯川歌合俊成云よえひか
たふた老まのぞみて後ま朝にえるこ
と夕まいわをれよはのむしろまわもふ
こと暁乃まくらにハそゞまることな
くれバ古き晴れ徳歌今の世乃徳作え

る事多くことも一もこゝろにのこる事なしと云云

又釋顕昭の和歌色葉集序に曰聊八篇をもて粗萬乃要を挙む一には和歌縁起二には種々名称三には避病次第四には詠作旨趣五には撰抄時代六には名誉歌仙七には通用名言八には難歌會釈なりとぞ和歌の色葉製作の手本なりこれをまなびさとりなばん詞を得む者歟と云云

又藤原清輔奥義抄序に曰詩はもろこしのうたへ歌はわが國乃ことゞなりきしもれなずらねどをもむきはひとつなるべし短歌は賦なり長歌は五言七言の詩旋頭歌は江南曲混本歌は越調乃詩聯歌は聯句なり四丈まるか

よひてありをよそながらみるところ
ことなる事なりしと云云

○

頓阿は高野日記に曰こよひは細元乃
庵に舎り侍れば扉ちかうならべて
七十にもたけ給へる海象といへる僧
のうちをしきに粟はいぬ志そひしほ
などいふものとりそへ十二三ばかり

は小僧もてくめり夜半のあらしを志
のぐまではやどり所とこそ思ひなべ
てし都のきびくろさわだゞ世の外
になり行てかゝる所もてなし世をて
人の身は上にはめづらしう侍るとて
四人身をそばめゐてくふさて海象の
縁ある事どものたまふ中に大師此山
をきりひらかせたまひてきてさせた

まふに木のみちはまくゝ文字のこと
をしらねばしるしおもむきをべき料もな
しさていろは四十八字をくしへさせ
たまひしより末の世乃人のまもけよ
もなまぬるなどきこえ侍りしかばさ
らむと思ひていろはを冠まをたて四
十八首をつゞり出し影前にそなふ
らくといひ苦といふこともしらぬ身は



罪もをそれすみさも教ます
まんしゆをも我ましなさま思ふなる
むかへさらん乃ちかひたれみて
るりれ池乃思ひ寄られてゆかしきハ
こほりま志川む水の月かな
れうもふし虎もうそふく山まして
御名をとなへハたるへきかハ
ろもかひもわれらへとらて法乃みち

まく舩ぬしをたのミてぞゆく

巳上

○

夢庵記ニ曰宗吒渡唐し侍し彼國ニて

夢庵ハ二字を仲和といふ官人の能書

ニかゝせてもてまゐり侍りしもひがけ

ぬ事ニて感情浅からず

かしこしなもろこしまても筆ニまさへ

さしてぞえぬるゆめの庵ハ

又宗輔同んにハ此庵号の唐筆をえせ侍

ましくハ國まてれもひ忘ざりぬる事

とおぼえて

水くきのうけし契やたくひなき

えぬもろこし乃夢の庵を

巳上

○

吉野記に曰千本のさくらとて數あま
たあり
吹ませてふかきやいつれ吉野山
千本にあふ花のちるかせ
又四本のさくらは蹴鞠は與あるもひ出て
鞠場にうつし植なんみよしの
四本のさくらあるもかけまして
又袖振山は天武天皇の御琴を弾じた



まひしに天人あまくだりて女子は歌
をうたひ袖を飜したる所なれば
むかしをもかへをやいりて女子か
花の袖ふる山風そふく
又西行ざくらは此法師は此山に三
年の間をまゐせし所なりと語りしか
べ花ちりなばと讀し言の葉も此所な
らんかし

もなに入て行もひしられぬ芳野山
やかて出しといひしことの葉に
漸日もかたふきぬれば麓の里に
たち帰て藏王權現の前にさくらを三十
本植させて
いつかまた十といひて三芳野の
わか植をきし花を来てみん
巳上

○
いほぬしに曰神無月の比熊野の御山
にまうでてさぶらふほどに霜月廿日比
ほどのおとまうでなんとてをとなし
川のつらにあそべば人しばしさふら
ひそまへかし神もゆるしきえ給もし
などいふほどにかしらしろたからを
ありて

山からすかしらもしろく成にけり
我かへるべき時やきぬらん
已上
案ずるに此歌は後拾遺集雑部にみえ
たり烏頭白き李吟註云云
○
ゐゆきぶりに曰はりまぢにしかまれ
さとしいふありかちどせをこしへだ

てきれども川なみの海に出まじるあし
はなるかにえわかされなにとなくお
もしろしていさゝか行過て川のほと
りちかく石の塚ひとつ侍り是は神の
います所なりけり出雲路の社の御前
にみゆるものゝかゝども二三侍りし
をなにぞと問しかば此石をむじめて
とをる旅人はたかきもいやしきもか

ならずられをとり捨て石の塚をめぐ
らてのちれとこ女乃ふるまひれま祢
をして通る事さやしくがいさかこそ
らいうれわざまてなん侍りしゅ郷ま
こそや此神のおや社まほどちゝき所の
うみ乃中まうたちまよひるがかゝり
にまなび侍る事びごとま御社乃ゆる
ぎ侍るとなんやめりおらさなるこそ



なるべし
つたへきく神代乃みそのまくそひを
うけとちゞひれほそもかしこし

已上

○

艶詞ま日あらたまの年月をくりむ
かふるにつけてれむふ事なきすしも
あらぬ身れ人まれぬ意地まさへやひ

いりぬるよしなさをこゝなる事はあ
りさまぞそれもひなぶり乃なぐさめ
に昔はあとをたづぬればちはやぶる
神乃御代よりみどのまぐはひしてい
もせを結ぶことたえずぞ有けらしそ
れよりこれかくさまし世をへて志ぎ乃
はねがきをかぞへ千來まで錦木をた
てふじの煙をわがおもひよりまつか



されどろき清見が関の志ら波は袖し
の浦よりまちはるゝかとぞさむざき
るせりつむ人もつりするあまもわき
もこがためにんをつくをといつり業
平乃中將も我身ひとつをもとの身
にしてとかなしみそしゆき乃兵衛
はかみは夢乃かよひぢ人めよくらん
とうらさまり三輪は山なをいかゝに

まちえんハ伊勢こそぞなり色
みえてうつろふものハ小町がれも
ひなるべしさぞなむかしの人だすも
かゝる思ひハありけともれもひとれ
ごもとられぬる遥すしかるよりふ
までにつれぬれもひろかぞくをも
しほ草かきあつめさしかまのいとを
しともやりふとてなるべし

人志れすうたりにしけるおもひくさ
れもへハ君そまぬもまさるる
已上
○
れもひれまゝの日記ニ曰卯月八日の
灌佛などまれいの事なれべかきとゞ
めず丈月七日ち七百首れ詩七百首乃
歌七調子の管絃七十韻乃聯句七十韻

の連歌七百はかぞのまり七らん乃御
酒なりさまぐれいは事なれバ注に
をよむず師走の佛名などいふ事まい
たく見所なき事なれど近衛の陣はか
へなしなどいふ事ふるはゝにかゝら
ず大將はふるまひなどいとも志ろ
し侍どもふきまわるなどかつぎてん
ちふけなるざまいとはかりしと云云

○うまくねは記に曰さてこの所をえる
にうはなるながらかゝるところもあり
ありとをごくおふさまなるにをこな
ひなれまるおま君たちはよひ暁はお
うをこたらず愛かしことにせぬれいは
をとなどを学につけてもそぞろにつ
もりりん年月のつみもかゝらぬ所に

てやゝなましかどいかにせましとた
もひ出るにのぞみもゆるしてちらしける
古里の庭もせにうちをちらせし秋風
はほけ三まいの峯の松風に吹かよひ
ながむるかどに面かげとえし月新な
りやうじゆせんの雲ぬむるかに心をく
くるしるべとぞなりにける
まて出しわしのゝ山乃月ならて



まれをよなく忘わかりけん

已上

○

長明方丈記に曰をよそ物の心をしれ
りしより此かた四十あまり春秋を送
れるあいだに世の不思議を見る事やゝ
たびくになりぬ去し安元三年四
月廿八日かとよ風はげしく吹てしづ

かならざりし夜戌の時ばかり都のた
つみより火出来りていぬゐに至るは
てには朱雀門大極殿大学寮民部省な
どまで移りて一夜の程に塵灰となり
にき
又治承四年卯月廿九日中御門京極の
程より大なる辻風おこりて六條わた
りまでいかめしくふきける事侍き　三

四町をかけて吹まくるまに其中に
こもれる家ども大なるもちいさきも
一つとしてやぶれざるはなしさながら
ひらにたふれたるもありけたはしら
ばかり残れるもあり是をとりつくろふ
間に身をそこなひてかたわづけるも
の数を知らず
又おなじ年の水無月の比にはかに都

遷給りきいと思ひの外なりし事なり
大かた此京乃始をきけバ嵯峨天皇の
御時都とさだまりにけるより後まで
に四百歳をへたりことなる事なくて
たやすくあらたまるべくもあらねバ
是を世乃人たやすからず愁あへる様
ことわりにも過たりされどかくいふ
かひなくて御門より始までまけりて



大臣公卿悉摂津國難波の京に移りた
まひぬうけり住人も残居れるものも
その歎きすくなからず是まで世の乱る
瑞相とか聞えける
又養和の比かとよ久しく成てましか
るも覚えず二年が間世中飢渇して老
若男女の飢死をするもの其數をしらず
仁和寺に慈尊院乃大藏卿隆曉法印と

りふ人かくして數しらず死ぬる事をかなしみて聖をあまたかたらひてその首に見ゆるごとに額に阿字をかきて縁を結ばしむるわざをなんせられける其人數をしらんとて四五兩月がほどかぞへまゐりければ京の中一條より南九條より北京極より西朱雀よりは東なる邊にある頭をすべて四万二



千三百餘りなんありける況やその前後に死ぬるものもおほく河原白川西に京もろ〳〵の邊地などをくはへていくばく際限もあるべからず又元暦二年に比大なる地震して堂舎塔廟一つとしてまつたからず或はくづれ或はまろびれ人畜に損亡おほし毎日二三十度ふらぬ日もなし十日廿日過て

しかば程なく間どをになりて或ハ四五度二三度もしハ一日まぜ二三日に一度など大方其名残三月ばかりや侍りけん

又按一期の月影かたぶきて餘算山の端にちかし忽に三途の闇に向はんこを何のわざをかかこまんとする佛の人を教たまふをもむきまゝ事にふれて



執心なかれとなり今草の庵を愛するも科とを閑寂に著するも障なるべしいかで用なき楽みをのべてむなしくあたら時を過さんはかなる暁このことわりをおもひつゞけてみづからんまことひていそく世をのがれて山林にまじはる人をれさえて是を行なんがきめなりしかるを姿はひじりに似

てんきにごりにしめりをみれハ則浄名居士乃跡をけがせりといへどもたまれさとるハわがりかに周梨槃特が行みぎも及ばず若貧賤の報のみづから悩まさる将又忘心の至りてくるはせる類が其時ん文に答むる事なしまゞかるさもらに舌根をやとひて不信の念佛名三返をヤてやミぬ時に建暦乃二とせ弥生の晦日比桑門蓮胤外山の庵にしてこれをしるすと

月かげハ入山の端もつらかりき
たへぬひかりをみるよしもがな

已上

○

高倉院嚴嶋御幸記に曰弥生の廿六日宮嶋につかせ給ふて大宮へまいらせ

諸御ほうら座いえて御きやう供養あり
金でいの法花經一部壽量品壽命經御
手づからかゝせたまひける御導師こう
きん僧正參りて此よしを申上らる九
重のなかをいでゝやへのしほぢをわ
けまいらせたまふ御心ざしなどきく
人も袖をしぼりあへず
又九七日にそらの氣色うらゝかにて



れわたりてのこり乃鶯杉もたえぬ深山
の木かげにかゝらふ苔を夜をこめて
しほうりとて御所の前までさしいり
まゐる様この世乃有さまともみえず
供御などそえてすしかば御宮めぐりあ
るべしとて宮へまいらせたまふころ
をぬの御きやう衣をぞ免しまゐる國ゝ
のかみどもまいらせまゐる宮のまへに

はこびをくらうみまへに樂屋をつく
りて拜殿をたてまつり内侍ども老たる
若きさま〴〵あゆみつらなりて神供
まいらせとりつぎたてがくどもして
御戸ひらきてまいらせそれぞれて夜
ま入にしかバこよひ御つやあるべし
さてまいらせ給ふ内侍どもあつま
りて夜もすがら御神樂ありふくる程



み七になるこ内侍なるみ神つかせた
まふてむじ光いきまふれふして暁中む
うりたへいりまし礼となし礼内侍ど
もかくへてほどへていきりげ御神樂
つかうまつるべきよし礼ほせられて
神主めしいでてさま〴〵の事どもや
さるめもおやまいうにとうこぐひを
なき人もありぬべきまさしもいふう

ひなきものゝさまぐ法文なぞゝれ
て御神乃もじ発て此嶋におとをきれ
給ふことハさてやきく人なみだをの
ごひぞとのふことをなし入乃めしいでゝ
れほせらるゝこそもありこれを人
きゝずも法花經の壽量品をたびく誦
じるるかゝべをうさふけずとのふこ
となしあるひハ爰ぞうれ女房らしろ



れ志やうじまうりて宝殿まむかひた
まへる姿を見るなぞや人もありつ
添まなりとれぼえぬにみひ神殿乃う
ちよりかゝうぞしくまほひこしあまき
れぞろきさもだあひぬ
又廿八日このわたりの浦ゝを御らん
ぞべしとてあまどもうりぎせさせ給
うらのもなぞれうり乃御なをしうら

おやれ志ろきさ御そ二御大くちたてま
つらせ給御をがさいみむかうなまめか
しうくつくもうみえさせ給ふうらづ
たひてさしまはして御らんぜ遊ません
のほらもかくやさまうぐうさもこれ
をいふまやされぼゆる所てのそれほ
うりえるめなどもてまいるとむうり
御らんじまありてか へらせ給ふてな



ごりれほきよしの歌つかうまつれと
ありしかべ
立かつりなこりもありれ浦なすれハ
かみもおもれをかうる志ら波
已上
○
みやこれつとま曰白川れ関まて
都まもいまやふくらん秋風の

身にしみわたるしら河の関
それより出羽國へこえてあこやの松
などえめぐりつゝみちの國淺香の沼
をすぐ中將實方朝臣くだられたるに
此國には菖蒲のなかりければ文に
水草をふくとあれどいづれもかなはず
ことなりとてかつみにふきかへたる
とやつたへ侍るに寛治七年郁芳門院





の根合に藤原孝善が歌に
あやめくさひくてもたゆくながきねの
いかで淺香の沼におひけん
とよめるは此國にもあやめのあるに
やと年月ふしんにおぼえしかば此度
人にたづねしに當國にはあやめのなき
にはあらずされどもかの中將の君く
だり給ひし時なにのあやめもしらぬ

しげりが新端までいかで都のたよりあ
やめをふくべきとてかりそをふかせ
られけるよりこれをふたつへまゐる
なりとかゝりけりしがばまもさる一
義も侍るにや風土記などいふ文にも
その國乃古老の傳などかきて侍れば
さる事もやとてしるしつけ侍るなり
といへり

○海道記に曰三河國八橋を渡る八橋よ
ありしよくもでに物おもふ人をむ
かしも過ぎや橋柱よはしむしらよを
のれも朽ぬるがむなしく朽ぬるもの
は今もまことぐ
をみわひて過る三河のやつはしを
ふゆきてもたちかへらまや

此もしのうへにたまふことをちかひ
てお渡らば何となくこゝろもゆく様
におぼえぬといへり

○

東関紀行に曰佐夜の中山をもこえて
程過行ほどに菊川といふ所あり去に
し承久三年の秋乃比中御門中納言宗
行と聞えし人の罪ありて東へくだら

れけるに此宿にとまりけるが 昔は
南陽縣乃菊水下流を汲て齢をのぶ今
は東海道の菊川西岸に宿して命をう
しなふとある家の柱にかゝれけり
ありと聞をきたれどいとあはれにて
其家を尋るに火のためにやけてかの
言乃葉ものこらずと中ものあり今は
かぎりとてのこし置けんかたみさへ

詮なくなりにけることそもかなきせは
ならひいそぐおもれまかなしけれ
かきつくるうたみも今へなかりけり
あとも千とせと誰かいひけん
又神無月廿三日の暁をでゝ鎌倉をた
ちて都へはもむくに宿の障子に書付
なすれぬれは都をいそぐ今朝なれど
さをかなごりのはしき宿か朝



已上

○

いざよひの日記に曰神無月廿三日天
まうろわきりとりふ舟にのるに西行
がむかしもはもひいでられていとん
ぼそしくみおもせきる舟まで一まて
はほくの人のゆきてにさしかへるひ
まもなく

水の淡乃うきをまわゝる程をみよ
早瀬は小舟棹もやすとえす
又あしがら山はみちさへしてもこ
ねぢまかるなりけり
ゆかしさよそなたの雲をそばたてゝ
よそになしぬるあしがら乃山
又やよひのを末川かさわかくしき
わらはやみまや日まぜにおこること





二たびになりぬおやしうあれもて
まゐるみちしながら三まびになるべき
おかつきよりおきゐて佛のおまへに
てこゝろを一つにして法花經をよみ
そのあるしはやなごりもなくおちき
るおりしも都のたよりあれば、かゝる
事こそなど古里へもつげやるついで
に御きやうれうあるしいときまふとくて

たのもしな身にそふ友と成にけり
まへなる法乃もなれ也りへ

已上

案ずるに或本に冠註に曰西行法師繪
詞云東のかたさまへ行ほどに遠江國
天龍乃わたりにまかりつきて舟にの
りたりければ所なしとてたりよと鞭をもちて
うちほどにかしらわれてちながれて



なん西行うちわらひてうれしめる色も
みえでたりけるをといへり

○

南海流浪記に曰須磨の浦乃氣色まこ
とに月の名所とみえけり
なかれゆく身にしあらすはをまの浦
とまりて夜半乃月をみてまし
又淡路國府八木に至りて羇旅のたも

ひまことにこゝろぼそし
さらぬだにねざめがちなる艸枕
まどろむ夢をふくあらし哉
又讃岐國に至りてのちに大師御誕
生所に参詣して
ある野山岩乃むろ戸にすむ月の
これふもとより出づるかさは
巳上



小嶋は口ずさみに曰ればうさこのた
びの御旅のなぐさみにきくよるひる
詩歌にてぞありしが中人に連歌など
いふことをこのむものにて點などか
たぐよりはほくやありしかどみな
むかしがありてかへしぬいまは都はい
でずちならでは何事かあらん九月九

日に重陽の御會あるべしとて短冊を
くばりける文人に右大臣道嗣已下四
韻の詩をたてまつるまで詩は懐紙を
講ぜられて次に歌の短冊をかうぜら
れけるとぞ此日にまいらざりし程に
あくる日一座をやりざきとて奏しけ
まし
宮人はことばのたまのいかならん

きのふをよそにきくは志ら露
やがて御かへしをうたくむへ給なり
まゐりしおふむがへしなどいふは常は
こそなれどこれはことにふすしみて
おもしろくぞおぼえはべりし
ゆふえてはことばの玉もなかりせん
きのふをよそにきく乃志ら露

巳上

住吉詣は曰是よりすみよしにまうでんとて天王寺にたちよりけれバ聖徳太子四天王をくさめをきたまふ又みづから御像をゑへをきたまふ石の鳥居亀井乃水なごんしづかはながれて

万代をかめ井乃水にむすびをきてゆくすゑもくわれもたのまん



それよりすみよしにまうりて四社明神をおがみまゐりて

四方のうみ深きちかひやひのもとのたみもゆたかに住吉の神

此御神は和歌の道はんざしふかき人をよくまもらせたまふと昔よりいひつたへ侍りことは秀歌を好む人これ神にまゐりて祈誓やせばかならずぞ

の乃まかなひろむるこそ
神代より傳へつたふるしき嶋の
みちまこゝろもうさくも宵か郎
又御前にまいりていとま申て下向し
侍りぬ
みゆきされいく千代までも行末を
守らせたまへとぞよし乃神
此一巻をところぐれざまを筆よまう



せて書きるし侍りまさ賤乃奥にもな
るづはとなり
貞治三年卯月上旬
義詮判
鶴千代どのへ参る
已上
○
十樂庵記よ曰佛の十快神乃十善よな

ぞらへて十楽庵と名付侍るハ我すむ
里の庵なるべし爰も都の辰巳しかす
む人のこゝろぞへハ雲よりたかくも
のすぐれたれど解脱のんばへあまむ
なりしからんやその十こゝかぞふるハ
なまくれなりそれど我名づくるハ此
二とせ三とせのころ國のうちに
行なひて宮古より此寺まうる人もあり



まこの國にまふでまゐられるもあま
或ハ國分寺にまゐでし行脚の人も侍
るに佛乃にもこゝろざし嚴嶋の乃に
もんばへあるを十人餘名のかさらひ
がたきものしてそれがいへること
我つぶやきしとくさをとむ昔を志
のぶ文字のをさみとなしぬ國分寺の
阿弥陀佛に百日經書てまいらせし此

佛性院の弘融比丘よみえる
いさねよくんも佛乃國分て
寺井よをとめる秋の夜の月
度會宗直入道常可
もしほ草かきのこをとも身よまたぬ
つみもむくひも袖よくれ庵さ
頓阿
乃とをく法乃淨國ハわかれとも
寺をたちをれ臺ともえ華
已上

〇

鹿苑院殿嚴嶋詣記よ曰康應元年三月
四日都を出させたまふて攝津國兵庫
の津より御船よのりらせ給ふ百余そう
の船どもみなをもづなをとくめりそ
れよりゆきくて安藝國むろ川そと

いふ所よ至りぬむかし生身れ文殊乃
御かほれがまんとちかひゐる人まつ
げありてこれこそ生身の文殊よとて
此所乃捨女きてしへゐる所ぞかしさ
ころれざま磯よ面白し岩ほゐるくたり
しきてそびえたる峯三四ならびつ
松柏むろなどいふ深山木こけれひさ
びりてうき雲うきくかゝれりそれよ





りまさゆきくて備後國尾道につか
せたまひぬ御座は大寧寺とて天龍寺
れ末寺なり海中までうたる橋かけて御
ゐとせりなまとなくめづらしかりき
いまへにこりかゝさまりしゐなれや
もしほくむてふあまのうたる橋
かのほこの若さまれ事思ひよせら
れてよめるなるべしといへり

富士紀行に曰永享第四の年長月十日
公方様富士御覧の為に東國へ御下
向ありて可ニ供奉一之旨兼日より被ニ仰下一今
暁まかりたち侍りしに相坂乃関をこ
えはとて
れもひきいれんもうれしたひころも
君かめくみにあふさか乃せた





に十三日三河國矢矧の里にて今夜乃
良辰月もことにくもりなく晴て名を
あらそし侍りぬることと千載之一遇万
秋之芳躅めでたくおぼへ侍りけれバ
君か代をなをも月乃つれの名も
取からにそひかりさしそふ
已上

伊勢紀行に曰永享五年弥生廿日御参
宮の日なり夜もすがら雨ふり風さは
がしかりしが辰乃刻ばかりそらうち
よく晴て御出の儀ことにありがたく
ぞみえさせたましまする公卿殿上
人馬くらをかざり衛府御随身あざや
かなる袖をつらねて供奉し侍るよそ
ほひきら〱しくぞ侍りし抑御神五



十鈴の川上に宮所をしめ高天の原に
千木高知下つ磐根に大宮柱廣敷たてゝ
志づまりましまを事ある世を守り國を
たもち人をもはぐくむ御ちかひなる庵
し今我君豊芦原千五百秋瑞穂國をつ
かさどりたましまして神をあがめ政
をまをとげ民をなでたまふ御めぐみも
神慮に隔なくたましまさる太田命の

八万歳をたもちまし〳〵て御子孫萬
世ならん事乃いともかしこく覚侍る
まゝに詠進三首
今朝まさて天乃八重雲ちれよ乃り
よれまのあやみちきよむらん
れよふへし君か齢もよろつとし
八度かさ孫し神乃むかしま
きみも猶いくよつかけて仕かまし



高天乃原れ神のし免縄
み御代中一日もあれさちりとや事さ
へ侍らでなりぬ猶は天代までも神鑒に
もかなえ世れたしまじる事ありが
たく目出度れぼへ侍りぬ
右普廣院殿御系宮れ時記之権大僧都
尭孝云云

善光寺紀行に曰酉の刻の斜なるに御
堂にまうで侍り思もざるに引導をる
人有て内陣に通夜せり剩本尊の瑠璃
壇をめぐりきまことに多劫の宿縁浅
からずとおぼえて歓喜の涙せきあへず
如來本朝御瑞現の往昔までおもひつゞ
けて

てらせなを濁りにしまぬ難波江の
あしまにみえし有明乃月

暁におよぶまでに月いと清らかに侍り
姨捨山をたもとひなりて
行ならてんそゝよふ更級や
姨捨山乃あたの夜の月
已上

○
藤川の紀行に曰きりきり峠の左の方

みそびえたる岩に松一木あるその下
に石塔あり西行法師が塚といひつた
へたるとなん西行が歌に
ねがはくは花乃もとにて春死なむ
そのきさらぎのもち月のころ
とよめることをおもひ出て
いかにして松のうけにをやとるらん
花乃もとにといひしことのは

已上

○

正廣日記に曰世中みだれて後は都に
すみかをとゞむべきさまもあらで大和
國泊瀬寺にある所ありて年月をおく
り侍るに摂津修理大夫元親にあひて
冨士見にまかりし筆にまかせて十首
よみて冨士淺間に奉り侍る歌

ふしやこれ雲間乃嶺にあらはれて
先めけらしな秋れもけ雪
冨士のねは雲ゐにゐるし大ひえや
はるかあけてもいかでたよまん

已上

〇平安紀行に曰ふじは山雲かゝりてさ
らにみえず

こゝろあてにそれかとそみる志ら雲は
八重かさなれる冨士乃芝山
都にのぞむ日は山おひ霧たちふさが
りて待りぬ逢坂山をこゆるとき
旅人にあふさか山はきりこめて
ゆくもかへるもわかぬころかな

已上

〇

冨士歴覧記に曰侍従大納言實隆卿や
つかハされたる
これはさいかにゑちんうつれ乃山
とをれ昔もちかきむかしも
かへし
今はまさ蔦むかりなるならましの
うつてになれはうつれ山越
是もむかし曩祖雅經卿ふじを侍らむ



とてくぐを侍りしに宇津の山まて
路分しむかしハ蔦かうつれ山
あとゝもみえぬつた乃下路
とよめりまた父雅世卿かの山をとを
侍りしに雅經卿の歌をおもひいで
侍りて
むかしたに昔といひしうつれ山
こえてそゑふつた乃下路

とつらね侍りしことを遠きむかしも
ちかき昔もとよめるなるべし
又宗祇法師たちぞなどいふまきもの
をむまのはなむけにをくり侍るとて
よみてつかはしける
きゑとをく立よりやかて杉もひやる
きみよなひかむふじのけふりを
かへし



杉もひけれふじの煙もたち花乃
なひくけふりにまれやあるらん
已上

○

武蔵野の紀行に曰あくれは八月十三
日紹巴いよ〳〵ふかくして尾もさだ
かにみえわかず馬にまかせて行長井
の庄にもつきぬまことやわかむらさ

これ巻にかゝる鉛身をわけいらんと
あるもこれなるべし大沢の庄などを
行まあふくをみざ川まもつたぬ川
都をえれがまことに志ろきをれたし
とあしとおかさるのむれゐて魚をくふ
ありさまむかしをおもひいでゝ
みやこより角田かたらに船をおれと
まくその人は名のみありたら

○

巳上

栗田口猿樂記に曰式三番にはきなの
あげまきやとりくさうまふを西方
呂なり呂律は中に呂あることに從言な
を挿猿樂と申事皆人狂言綺語乃戯と
のみおもひそれをうら狂讃佛乗の因
なるべし然に我朝神道の隨一にては

るゑにそのみなもとをたゞさばあまて
るおほん神あまの岩戸に引こもらせ
給ひし時やをよろづの神たち歌をう
たひ神樂をそうし給ひけるより岩戸
もひらけ世もあきらかになりしかば
神をやはらげ世ををさむる事ふさる
に遍まることをあらじされば今にいた
るまで神はやしろのまへそのづくり



の人は家にても狂言のもじゑにまさ
まれこなふならひにて侍る又うまふ
さやもとより歌をうまふにて侍れ
ば歌は此國の風俗なればとりわけや
まとうたにてぞ侍る目にみえぬ鬼神
をもあらそしまけきものゝふれあも
れをあはせるこれ歌なりと貫之が筆は
あそぶすもとればえまりそのくち人

乃をと成て上宮太子などことにならら
をせつさへたまふ事より佛教にもえ
え侍ればずにも歌舞れぼさりなりみ
あるも女れ姿をえせあるも夜叉乃か
またちをあらはせども事をなりぬれば
もとの身なりさても第四日六番をてく
狂言れほどに芝居よりかへで乃枝に
短冊をむすびてさんじきれこそのう

ちへさし入侍りそりてそれは繪など
いとうるわしく書まるたんざくに歌
もなくてすゞむをび付てぞありける
扨まそ此まんざくに歌かきてそのぞみ
侍る事にやそれもひたまつるにそれ
は兒まち若衆なども侍る中くとうく
いひ出ぬもいふにまさりまるんぞへ
まやさうつりてめでたかにもんふう

くもたがえ侍りし兒達れさんじけの
かえにて遊びて准后乃わざらせ給ふ
に作りけて給て書てつかえを贈答に
て侍ればこと短冊にてこそと申事に
て硯短冊などふところにかくし来る
わかき人々とり出しひし見えさあつり
ける筆は無量壽院僧都なる庵し
何とさてかもしもせまし云の慕れ

はなも咲ひ乃絶しみえねハ
今れ世よそうなりの事もそうあるん
ちしして侍る又行末まもかゝるこゝろ
づかひまれくも侍るべきとて書る
しをたに侍るものなり
永正第二仲呂前法性寺座主大僧正　誌
大永元年霜月中一日書寫之　尊祐
書絶てあともとゞえしと於あふ世よ

うたれ水くきれもしやせらん

已上

○

九州乃みちの記に曰太相國もろこし
かうさむけさせたまはんとて天正のを
ゑりうき筑紫に御出有べきよし事さ
だまりにけれバ日の本の兵のこらず
供奉をみづからもむ月乃中の五日比

に京をおもひ立なんとし侍りけるに
人のもとよりたむそ調してきまゐと
て此二首をなんくえへられまゐりける
玉鉾乃みちの山風さむからは
かたみかてらにきなんとそ思ふ
あまたにはぬひかさねしとから衣
おもふこゝろはちへにそありける
被れむそえならぬものがたりのこと

ろを筆れかゞりら川くしくゝさてと
る手もくゆるむゝりにおひまをさし免
られまりゝへし
きみならてたの山ゝせさむしとも
まれゝいそもん猿乃をまて
んさしふゝきいろゝれからころも
ゝへをくもかさみとやみん
みつくしまて



わゝれていく年ふとも今まに
あらハふまてひゝへらさらめや
巳上

○

蒲生氏郷紀行ヶ曰陸奥より立出てゆ
くほどヶ下野の國那須野の原といふ
所ヶつきぬあまりに人氣もなく物さ
びしゝりつるまゝ　ふと思ひつらねて

世中に我ら何をかなしの原
なしとわさもなく年やへぬ庵き
などいひくて世遁るる上野をも
をだて信濃國に入ぬ淺間れだけに步
ふり乃まりをえて我んにれもふ人れ
事を思ひてよみける

志なのなる淺間れたけも何をおもふ
我のみむねをこがすと思へば

巳上

○

玄旨法印をいさめることばに曰まこ
とに此名れひじをたちみこそのりを
うけたまつり和歌のうちにしてひろ
へる玉れかどくいやくちをこにも
遁ぬらんかし家の風かれらを行り名
の月やまれなむときなく嘆ゆる中に

も五條乃まうちぎみより京極黄門は
一なガれ其末たえずして玄旨法印ま
で正き筋をつたへなうしたまつりと
ぞまことはあふぐべしまうさまざらん
やは遥まし八月九日はかくれ給ぬれ
ば定家卿の正忌にさへなうしはろり
さるべきたちぎりやありろん西行法師
がその二月はとよそて歌みてまうし



を彼卿を月乃比ほたがちぬとやとふ
らひ給しかさじ有難埋れぬ名もさ
こそはとそのもしくて
かえらすよるさその名も小倉山
あきれ九日はさえし月影
惜き哉たしくやはあらぬ立つつり
旨をそさねこ舜人乃別も

巳上

○阿多物語上に一に曰古今の序に花に
鳴うぐひすときいすしへ孝謙天皇の
御代に大和の國たかまの寺に住僧の
寵愛のうつくしき童子ありしがほど
なくみまかりて後三年の春童子うぐ
ひすとなりて軒端の梅にきたり初陽
毎朝來不相還本栖となきぬるを文字



まうけしてこれが
もりはるのあしたごとにきたりけれども
あそでぞかへるもそのさとみかに
といふ歌なりみ水にすむ蛙とよむか
し壹岐守紀良貞といふ人住吉にまふ
でわすれ草つゞる木陰に美女一人き
てり良貞けさうしこれがかさねて家
にきさまへあひみんとちぎりてく

みまたちかゝりぬみれば手にとこゆけどありし女もみえずなりしも砂にうへをかきし川のまへわするさるあとをみれバ

住吉の浦乃みるめもわすれねバかりにも人にまたとはれぬる

といふ歌の文字なりしはさてもありし女も蛙にてありつらんとこゝろゆるんもやこゝるとなんといへり案ずるに此説は古今集の序にはあらずといへどもゑをてがきたるがゆへに爰に写置ものなり

○

續畸人傳第二に曰臨江齋紹巴は南都の人にして連歌を大東正雲に学びしが後に周桂にしたがひて妙に至りそ

のゝち豊太閤の時にあひて志だく
かへりみをかふむり甚名をあくる
し生得媚へつらふことなき人にて或時
太閤の御前に侍りしに公
おく山にもみぢを分て啼螢
といふ句をなされて懐紙にかゝせと
仰ありしに紹巴頭をふりて御句にき
こえしさむらへど季もたがひ螢はな



くとやことは有まじき事なりとて筆
をとらず公も色を變じたまひそれに
てもくるしからずと仰せられどいか
にもよろしからぬよしやうるに此公
は御詞をかへすものは四海のうちに
なかりけるにかくあらそひやを玄旨
法印いまだ藤孝といひし時にて座に
ありいや螢も所によりてなくものに

やりけれの集にか
むさしのゝしのをつかねてふる雨に
蛍より外なく虫もなし
とあるを御台よろしからんと取なしけ
れば公それぞよと作るに紹巴もこ
とばなくて筆を染けるさてその昱日
藤孝の卿もとに来りてきのふの歌は
めづらしきことに侍る何の集に誰人

の哥為にやと尋られければ大笑ひし
たまひ律義なる人かなあれは当座なる
歌がいづくにあるべきぞあれはわぬし
が首をつぎまするなり此後何事を作を
もかまへてあらそふまじなどいま
しめたまひけりされバまさる或時に公
谷かげに鬼百合艸さいて首ぐなり
といふ句を作たまふとき紹巴二三遍

沈吟していかにも神妙の御句なりとて
懐紙にかきとめたれば公紹巴が歌
を御覧じ蛍はなかざるしか百合艸は
ぐなりとせしかと作たまふ時紹巴よ
ろしき例も候慈鎮和尚
まくずが原に風さわぐなり
と作られ候とかたれば不斜興じたま
ひ紹巴はかしこきものなりと作たる



となるのちに紹巴終焉のは慶長五
年なり玄仍玄仲などいふ子ありてい
づれも連歌の名匠なるといへり
案ずるに太閤秀吉公天正年中高野山百韻の連歌
には太閤秀吉公の句も數多あり又山
州名跡志都名所圖會南畝莠言等には
秀吉公乃よき歌かずく載たり此傳
の趣は諸抄と異なる事に爲ぬべし

○雨ごひに和歌発句を出さん

能因法師

天のかは苗代水にせきくだせ
あまくだります神ならばかみ

肖柏法師

そらにあるや雨をのぞみの秋の雲

宗祇法師

桐の葉に雨をうごかせあきのくも

案ずるに和歌も発句ももとにその時に臨んで感応ありし由伺書にみえたり亦老衲が文化八年のなつむさしの宝珠山において雨をこひし時

たみくさの葉ごとにそゝぐ夏の雨

おりしも水無月のはじめよりうさまて久しく日でりつゞきしゆへくさぐの

慕も志ほるてむりみえけるころ祈
雨の日數は七ケ日なりしうち後の三
ケ日潤澤に雨ふりて郷外までもよろ
こびにありちなみに俳諧の發句に
感應ありしといふを出さん

夕立や田もみめぐりの神ならば　其角

案ずるにこの立の字にも古來きちた
つきての三訓あるなりたての訓にも



ありし
又止雨の祈りの和歌を一首出さん
　　　　　　　　　　　　鎌倉右大臣
ときにより過れハ民乃歎きなり
八大龍王あめやめたまへ
　　　　　巳上

○
和歌はちくはくのあうなりといふ歌

を巻軸に出さん
なにはづにさくやこの花冬ごもり
今は春べとさくやこの花　王仁
あさか山かげさへ見ゆる山乃井の
あさき心をわがおもはなくに　采女
已上
案ずるにむかしは手ならひのもじ先
すもいろは抔習ふ事はなくて此二首

此歌をならひそむるにや源氏若紫巻に
源氏中将北山にて紫上はさなきを見
て文つかはしたまひしに祖母乃尼公
まだ難波津をだにはか〱しくつゞけ
け侍らぬといへり其比は難波津の歌
をならひそむることせられけり以上古今序
季吟註本にこゝろなり

右此一帖を連歌茶談前後續三編我むさしの延命寺にをゐて再治乃時志ずそれぞ志ぶらくのこしをきしが亦とるをありえて残編と号し眷屬等にあたふるもれなり愚老が婆心かく乃ごとし来者是我察を為し云云

白雲堂無相



附錄

○抄物作者此事

一土佐日記を貫之延長八年十二月廿一日より翌年二月十六日迄此日々乃作まして一巻なり

一高倉院嚴嶋御幸記を土御門内大臣通親公治承四年初春より四月八日まで此作まして一巻あり

一檜垣嫗集は一巻にして奥書に曰元
久二年五月廿九日校合畢従三位平
朝臣と云々

一海道記は源光行貞應二年四月さじ
免より五月上旬迄の作にして一巻
なり

一東関紀行は前河内守親行仁治三年
八月十日より十月廿三日までの作
にして一巻なり

一南海流浪記は正智院道範阿闍梨正
嘉二年の作にして一巻あり

一いざよひの日記は阿佛房建治三年
の冬より弘安三年乃春までの作に
して一巻なり

一悦目抄は基俊の作にして一巻あり
奥書に曰正安元年二月十七日前大

納言為世と云云

一 奥義抄は藤原清輔乃作にして上中下三巻之上は本末ありて中下に上中下あり都合八巻之奥書に曰正和五年以清輔朝臣自筆之本書写と云云

一 都のつとは僧宗久観應年中の作にして一巻あり

一 小嶋乃口をさみは後普光園摂政関



白良基公文和二年文月より長月迄の作にして一巻あり

一 十樂庵記は頓阿法師貞治三年二月下旬の作にして一巻あり

一 仙傳抄は作者をしらず一巻にして奥書に曰此仙傳抄は三條殿御秘本頼政公依御所望文安二年三月廿五日冨阿弥相傳といへり

一善光寺紀行は堯恵法印寛正六年の作にして一巻なり

一藤川紀行は後成恩寺関白兼良公文明四年の作にして一巻あり

一正廣日記は文明五年の作にして一巻なり

一平安紀行は源持資文明十二年の作にして一巻あり奥書に曰右此紀行者太田道灌入道平安之筆記也と云云

一冨士歴覧記は中納言雅康卿明應八年五月の作にして一巻あり

一猿楽記は前法性寺座主大僧正永正二年の作にして一巻なり

一狂歌合は作者をしらず一巻にして題下に云永正五年正月二日衆儀判後日加二判者詞一とあり

一御撰何曽は一巻にして終は永正十三年正月とこれあり
一武藏野の紀行は北條氏康天文十五年乃作にして一巻あり
一蒲生氏郷紀行は文禄元年の作にして一巻なり
一玄旨法印をいさむることばは作者をしらず一巻にして終は慶長十五



年記之とあり
一阿多物語は平為春の作にして上下二巻なり寛永十七年の梓行なるは上下ともに一二を分て四巻なり
一續畸人傳は閑田廬蒿蹊寛政八年の作にして五巻なり
一枕艸紙は清原元輔のむすめ清少納言乃作なり北村季吟云此草子異本

さまく有之或ハ二冊或ハ三冊或
ハ五冊一決なかりしといへり
一更科日記は常陸介菅原孝標朝臣女
の作にして一巻あり
一馬内侍集は一巻にして終に右馬内
侍集以村井敬義本校合とあり
一今物語は前右京大夫信實朝臣の作
にして一巻あり





一うたゝねの記は阿佛房の作にして
一巻あり
一いほぬしは増基法師の作にして一
巻あり大納言為氏卿真蹟と云云
一おもひのまゝの日記は後普光園摂
政良基公の作にして一巻あり
一冨士紀行は贈大納言雅世卿の作に
して一巻あり

一夢庵記は肖柏法師の作にして一巻あり

一吉野記は飛鳥井前大納言雅章の作にして一巻なり

一道ゆきぶりと鹿苑院殿厳嶋詣記とは前伊豫守貞世朝臣の作にして一巻づゝあり

一艶詞は入道大納言隆房卿の作にして一巻なり

一九州のみちの記は豊臣勝俊朝臣乃作にして一巻あり

一此編の中に和歌をおほくのせてまゝそのよミ人乃名のみをあらはして抄物の名をいはざる事は八代集の中乃歌なるがゆへなり

一八代集を往ゝにかきのせるといへ

ども此附録れ中ゝもその作者等を
出さゞることハ茶談後編乃中に二
十一代集の撰者ならびゝ年月巻数
等を委しく徒むるがゆへに八代集
も其中ゝいれバ今爰ゝ略して録
せざるなり

一前後續三編れ附録ゝ出せるところ
乃抄物を今此残編の附録ゝも略し
て載ざるなり

一續編ならびゝ此編れ抄物作者の事
を多く群書類従ゝ載まる所乃もの
なり案ずるに類従を温古堂老人れ
たまものゝして六百七十冊ばか
くれごときの大部なるもの速ゝ
上木成就せし事を實に天満宮乃擁
護ゝもやあるらんまふとむべし

寛政七年
从巳辛未